

時間があれば大抵のことは楽しめるんだよ。こんな板を作ったり、薪を集めたり火をおこして料理するのや、畑仕事、洗たくだって十分時間があれば楽しくて満たされた気分になるよ。」

「思うんだけど」彼は今、その続きを語ってくれる。「人間は視覚的に心の中にイメージを作り上げるんだよね。自分がある時間内でこれくらいまで成し遂げられるって。1日とか1週間、もしくは1年間で。でも僕が初めてここへ来て気づいたのは、そのイメージと自分が実際に達成できたことのギャップだよね。何か落ち着かなくていらいらしていたね。けれどだんだんわかってきて、僕のイメージと実際に可能な計画を調整することを学んだね。」

きっとこのことが中村さんの存在をこのようにゆったりさせているのだろう。長い計画のリストを急いでこなすことより、自分の持ち時間をゆっくりこなせる程度に計画の数を減らす…。中村さんは、自分の内面の過程を見つめるに十分な余裕を与える、ゆっくりした生活のペースを設定することが自分に満足をもたらすとよくわかっているのだ。

私は、はじめの頃に中村さんを訪ねたとき彼が言ったことを思い出した。（そのとき私は理解できていなかった）、「僕はこういうあり方を実験として選んだの。自分の最良の生き方を発見する手段として。」その後、多くの会話を重ね、彼が抽象的な理想を想定して生きているのではないのだとわかった。彼が言うように「何でも僕がやっているのは、こうやるのが楽しいからやっているんだよ。ガスで調理してもいいんだけど、そしたら薪を集めたり割ったりする楽しみがなくなるからね。自分で野菜を育てなかつたら土にさわる楽しみがなくなるしね。」

家の外では雪が雨に変わっていた。雨が屋根に当たる静かな音を聞きながら、中村さんは古い布団を私のために敷いてくれた。布団が私の体で暖まる間、日本の田舎の懐かしい静寂が、再び私の上に落ちてきた。下方を流れる谷の音、屋根に当たる雨の音を聞きながら、私は眠りに落ちていった。

**朝**になって私が目を覚ますと、中村さんはもう起きて朝食を作っていた。窓の外では深い霧が暗緑の杉林の上を漂いながら雨模様の谷をわたっている。まるで中国の水墨画そっくりだ。

竈で中華鍋たっぷりの湯を沸かし、その上に竹の蒸し器をおいて、中村さんは堅めのマフィンをふかしていた。炎のパチパチという音が、中村さんの生活が薪の火中心に営まれていることを知らせてくれる。卓上ではツァンパに入れるデーツなどのドライフルーツが刻まれている。ツァンパとは、チベットの主食で、煎った大麦粉、ドライフルーツ、そして一片のバター、酸味のある阿波晩茶（中村さんの場合）を混ぜてこねて食べる。わたしのいつもの朝食とは違うが、これも暖かくておいしい。特に、ドライフルーツが味を引き立てている。

外を見ると雨は、一日中降りそうな様子である。今日のような日はどんな風に過ごすのか尋ねた。

「木版を彫るときもあるし、読書をしたり、でも大体は何もすることがないときは火をじっと見ているね」彼は言った。

「一日中何もしないって最初は難しかったよね」彼は笑った。忙しくしているのが習慣だったから、それを破るのが難しいと。しかし、このようなほとんど生産せず、ほとんど消費せずの生活は、世界環境の危機を解決する重要な一策であろう。

山の上のはるか彼方の雲を見ながら中村さんに尋ねた。

「あなたの生活は、贅沢だと思いますか？」

「贅沢？ううん、贅沢じゃないよ。ふつうの生活だよ。でも満ち満ちている、豊かだという感覚はあるね。百年前だったらどういふ生き方をするかなんて選べなかつただろうな。この時代に生きているのはすごくラッキーだと思うよ」

中村さんは、少量の蔵書を（銘々の本は黄色のクラフト紙でカバーされ、彼特有の手書きで題名がつけられている）奥の寝室になっている部屋にある引き戸のたんすに入れてある。囲炉裏の部屋に飾っておけば背表紙の文字が、何もない空っぽの印象を紛らわしてくれるだろうに。しかしながら、たぶん、中村さんの家で一番不思議に見えるのは壁と引き戸の材質と色調であろう。濃い照りのほとんどは単に長年の炎から上がる煙と元々の素材—木、紙、土、藁—が古びたせいであるが、その効果は良質の芸術品、もしくはある種の感性に訴えるものとなっている。床の焦げ茶色の敷物からはじまって土壁、ライスペーパーの障子が、羊皮紙の黄から琥珀、褐色、濃いカラメルブラウンと微妙な変化をとげ、天井を横切る梁の黒と接している。杉と檜の炎から放たれたタンニンと樹脂は湖の岸に細かい泥が堆積するように壁に集まり斑文様を残している。

**湯**が再び沸き、中村さんはまた茶葉をつまんだ。急須の茶の香を嗅ぎながら、一昨年夏に中村さんと村の人たちから山の発酵茶の作り方を学ぶためにここへやって来たことを思い返していた。7月の熱気の中で山の斜面の茂みで大きな葉を摘み、胸にかけた藁籠から鉄鍋の煮えたぎる湯の中へ摘んだ葉を移す。長い柄の着いたすり機で茶葉をすりつぶし、磁器の瓶に入れて石をたくさん乗せ、一ヶ月間おいておく。何でも必要なものは手で作っていた昔から村人は、まさにこのとおりのやり方ですっとお茶を作っている。

日本では、1950年代の終わりまでずっと大抵の田舎では現金は殆ど使わず、自分たちで作れるものだけでやっていかなければならなかった。中村さんが言うに、日本中どこでも、山そのものが人々の生活の糧の主な源だった。山菜、薬草、道具の材、薪、屋根のわらなど何でも供給してくれた。しかしまでは、車と金の普遍的な流通で山はただの不便な場所、何か訳あって運悪く止まらなければならない場所になり下がってしまった。

「田舎に対する価値観と生活形態が変わったからこそ」と中村さん、「僕がここに住めるようになったんだよね。五十年や百年前だったら僕のようなよそ者がやって来て住むなんて絶対できなかったよ。この家もそうだよ、空き家になってなかったよ。それに共同の水や道は昔からずっと一緒に修繕や維持をしてきてなかったら、使わせてもらうなんて不可能だったよね。この家でこうやって今暮らしているのは、ほんと、僕が少数のマイナーな人間だからだよ。もしみんながこんな風に生活していたら朝は早くから起きて薪拾いに行かなきゃならないよね、でないと誰かが先に全部もって行っちゃうから。」

中村さんは私が知っている限りでは相当自給率が高い人だが金も使う。一年に4000ドル稼ぐために彼は10月から、4、50日、村を離れて働きに行く。行き先は十九世紀（明治時代）の建物を再築した工芸村で、そこで伝統的なねばりのある白米のもちを炭火で焼いて（五平餅）、古い日本を愛でる観光客に食べさせるのだ。

この木版画では、しかし彼はお金を受け取らない。「もし貰ったら」、彼が言うには「膨るのが楽しくなくなる」生活が楽しくなくなるというのは彼は絶対にしたくないことのようにだ。

「夏には」中村さん、「地元の人たちとお茶を作る時や薪を集める時は『仕事』で、『労働』ではないね。晩茶を作るっていうのは、1年に1回それをしたらあとずっと1年中お茶があるよね。工芸村でやるような賃労働は、お金のために僕の時間を渡してしまうんだよね。そして何でも言われたことをする、楽しかろうが楽しくなかろうが」炎が衰え炭になるのを見つめながら私は、彼がいかに少量のものしか消費しないでなおかつ生活に満足しているかを考えた。中村さんはふんだんにある水や庭のスペースにさえひどくつましい。本は数冊しか持っていない。彼が言うには「大事な本は二年か三年毎にまた読めるから、年を取って変わるにつれて同じ言葉から違う意味を汲み取れるからね」彼はまるで肉体と物に対する貧欲を避けて精神修養をしているかのようだ。

清貧は窮乏と同義ではないだろう。そして私が思うに彼の家と心が散らかっていないので訪れる人はすぐに心が落ち着くのだ。彼の物に対する注意力が彼の一瞬一瞬を安定したものにしているようだ。張り出したひさしの下に積んで乾燥している薪、きれいに草をむしられた庭の竹格子、木とブリキの洗濯板、これで衣類を全部洗う。私ははじめて中村さんに会ったとき心の中で思った。「何もかも手でするなんて大変だ！しかもこんな程度の設備では！」しかし私がそれを言うと実に彼らしい一刀両断の答えが返ってきた。「もし

な技術が入っているよ」

木箱の中から彼の昔の作品ネパールにいた時のものが出てきた。その仏像の図は全く趣が違っていた。殆ど透けるようなライスペーパーに刷られているのは、腕のたくさんある女神で、蓮の花に座ってたなびく雲に包まれている。線描はレーザー光線のような細さで流れるよう。名状し難い優美さがある。

中村さんは棚から手とじの別の本を何冊か出してきて、日本の布紙表紙の本の閉じ方を見せてくれた。どの本を見てもその手間のかけ方におどろいてしまった。これほどの手間がかかるとそれぞれ数冊の複製を作るのがせいぜいで、しかもほんの少数の人しかこれらの本を目にすることはないだろう。

労多くして益少なし。しかし、それとは対照的に機械の工場が同じ本を何万冊と製本して売るとしても、手とじの本の簡潔な手応えと美しさは、それとは全く違った種類のよろこびを読者に与えてくれる。

中村さんが綴じた本の中に、藁ぞうりの編み方を他の本からコピーした本があった。ずっとページをめくりながら、中村さんと知り合ってからどれほど「クラフト」に関する私の考え方が変わってきたかに気がついた。クラフトが家で退屈な時間をうめるための「素敵」な気晴らしではなく、今の私は、それがもっと昔からの基本的な必要をずっと満たしてきた手段であることを理解するようになった。

穀類をふるう箒（ざる）、体をおおう織布、熱されて打たれた金属の耕具、図像や言葉を伝達するための印刷の版木など、中村さんと時を過ごす間に、藁ぞうりや手製の本を作るといふ、間違いなく有意義な作業の過程で人々が謙虚になってゆくのを見てきた。

それでもなお、私は彼が本の表紙を縫う苦勞を聞くと一紙の下で布をどの角度で折るかとか、表紙は束ねたページよりも1ミリだけ長くするなど一本にここまで入念にしなければならないのかと考えてしまう。

それに対する中村さんの答えは簡単ではっきりしている。「こういう風に作っておけばあとで何時見ても楽しいじゃない。」彼が何かを作るときに十分注ぎ込んだエネルギーは、ずっと彼の魂を繰り返し養っているのだ。

藁ぞうりの作り方の本をもう1度見ると、ただの機械コピーした紙が、綴じられて赤と黒のネパール布の表紙をほどこされると、単に機能性だけを求めて簡単に済まし得たものが、美しいものへと変身したことが分かる。中村さんの情報整理方法の優雅さ簡単さに比べると、私の家中にたまった紙の山と、紙を入れた箱がころがっている様子は実に全く好ましからぬ情景だ。

そのことを言うと彼は本棚へ行って黄色いクラフト紙でカバーされた小さい本を取り出して言った。「もし僕が明日こういう暮らしを後にすることになったら、僕はこの3冊の本を持っていくね、これは柳宗悦が1920年代に「民芸の文化」で、柳は「美とは何か」を自問していてその答えは『一般の人が毎日使う日常の道具』だったんだ。」

柳氏は私の知っているところでは、日本における民芸運動の先駆者であり、当時、日本人の抱いていた、美とは高価で人目を引くものである、という認識に反対をとらえた。彼は日本列島を隈なく旅し、そして朝鮮へも渡航し、農民と生活を共にし、粗末な土製の飯茶碗や手編みの木籠、竹籠、わら籠などを見いだした。それらは皆、彼にとってはより微妙な、含蓄のある美であった。柳氏の言葉で『用の美』、ここに中村さんの求める生活の底流をなすものがあるのだ。

もう一度、中村さんの3つの部屋を見廻し、新たな目でその美しさを受け入れ、炉の煙のほかは何もないように見える家の美を感じることができた。私達は囲炉裏に戻りまた火を燃やして晩茶を淹れた。私は気をつけて側の火おこし用の簡素な道具類を見つめた。小麦色の薪の籠が数個、火力を強めるための火吹き竹、どれもが彼が熟考して選んだものばかりなのがよくわかった。隣の料理の部屋の陰にはナツメグ色の陶磁器の水瓶がある。流しの右には蓋を取り付けた黄土色の壺があり炉の灰が入れてある。これと天然素材のゴワゴワしたブラシ（たわし）が彼の皿洗いに使う総てである。黒くなった木の食卓の一方のはしには琥珀色の木の棚があり、さまざまな大きさのガラス瓶に香辛料、粉末香辛料、唐辛子、数種の小麦粉が入れられ、大きさ別に並べられている。均整の取れた、持ち手が先細の鑄鉄のへら、いちょう型の鍋返しは棚の中央の柱に吊されている。棚の後ろには穀類の入ったガラス瓶がわらの籠に入れられ天井からぶら下がっている。

。

画入りの雑誌をとり上げた。日付は1973年。

「最近のこの雑誌は雰囲気は70年代ほど良くないんだよ。だからその時の記事を何回も読むことになるんだよね」

中村さんの何も持たない生活ぶりと、彼の洗練された思考や対話のレベルと比較したとき、彼のが人生において何を一番大切にするかという優先順位の付け方の見事さに感嘆せざるを得ない。殆どの時間を彼は薪を切ったり集めたり、食物を育てて調理し、火を見つめて過ごしているが彼の知的営みは全くそこなわれていない。それはまるで達人の域に達した工芸職人が人生の他の分野でも達人であるかのようである。

✂ 食後中村さんが木版の仕事をする奥の部屋へ行った。彼は見事な古ダンスの中から彼の最新作をとりだし木の机にのせた。それは桑の伝統和紙に刷った一連の版画で黒っぽい群青の布表紙をつけた見事な手綴じ本である。

一時日本の本が大概そうであったようにこの本もアコーディオン式に開く。それぞれ組になったページの一方の側に黒と赤の幾何文様のプリントの粗いネパール布の長方形のサンプルが貼られ、もう一方にそれと同じ文様の、中村さんが和紙に刷った木版画が貼ってある。中村さんのこれらのデザインの復刻には彼の性格の几帳面さがよく出ている。彼の版画はネパール布と同じ彩色法を用いているが寸分のずれもない。フライホイール文様、バラ文様、シェブロン（V型）文様、ジグザグと斜線が正確に合わさり、溶け合い、切り換えられ、私の目は錯覚をおこしてまるで幻覚を見ているようだ。

この美しい本のページをめくりながら私は、これは昔の文化の保存とその解釈の変化を同時に表現した仕事だと思った。ネパール布のサンプルでは黒と赤の文様の線はぴったりと合っていない。しかしそれにもかかわらず布には不思議に引きつけられる美しさがある。それは民芸だけの持つ用の美である。それは山の農民の暮らしぶり、何千年と存在した生活形態を語っているようだ。「僕がはじめてネパールに行ったときには」と中村さん。「90%以上の人々が木版の布を着ていたけど、小さい木のブロックのね。一番最近の僕の旅行では10%以下だったね。シルクスクリーンだとずっと短時間にずっとたくさん刷れちゃうもん」—私は思う—製産の効率化、合理化の結果としてまたひとつ大切なものが失われた。

中村さんはまたたすの中から何個かぶ厚い四角の版木を選んで出してきた。彼がこれらの木版画を作るのに使ったものだ。どれも込み入った1種類のパターンが固い厚い板に並んで深く刻まれている。1つでも削りがすべってしまうと文様が台無しになる。そして最初の浅い削りからはじめなければならなくなる。

僕は彼に、この同じことのくりかえしの、失敗のきかない作業をしていると頭に来ないかとたずねた。

「そうだね、たしかに細かい念入りなものを作るのは集中力がいるね。で、はじめはちょっと緊張するしね。失敗するんじゃないかって心配だからな。僕の経験ではそういう気持ちは30分かそこらしか続かないよ。だけどやり続けると突然時間のない空間にスリップしてしまうの。そこでは作業と僕が別々でなくなるんだよ。作業だけがあるんだよ。そしてそこから出てくると何分経ったのか何時間経ったのかわからないんだよ。そういうのが手仕事の特徴だよ」

「職人の仕事は半分瞑想で半分創造だね。何でも何かを作っているとそこに創造性が要るんだけど、それを正しくやるには瞑想がいるんだよ。何かを自分の手で作ることは何か豊かさ、開放性を心にもたらすのかな。職人自身の心を滋養するんだね。そしてそれは生活全体に親密に関わってくるね」

それで私は私の国に伝染病のように拡がっているその面での退化を思い出して悲しくなった。それは、手を使って働くことを嫌う私達の文化と関係があるのだろうか。多分、工業化された社会の人間だからと言って”肉体労働”が元々嫌いというわけではないだろう。しかし私達は手仕事を、品格を下げることと見なして嫌悪し、人間の本質的な一面を手を介して探求できることとして感謝を抱くことも出来ない。それは非常に残念なことである。

中村さんはチベット木版の勉強のはじめに生徒が使う図を見せてくれた。それは仏像でも文様でもなくてチベット文字の表で、矢印が彫る角度と強さを示している。チベット文字は実に美しい。アラビア文字の流麗さがありながら角張っており、刀剣のような堅固さがある。

「チベットの文字を正確に彫る練習には」と中村さん。「目と指と手と全部、有能な彫師になるのに必要

会うこともなく、その人が『カトマンズの仏僧にあって伝統工芸について話しをするといい』と教えてくれることもなかったし、その仏僧が会ったときに木版の先生が山に住んでいることを教えてくれることもなかったんだよね、それでも僕が木彫の勉強に行かなかったら今しているような生活をしようという気にはならなかっただろうね。そのときは全くふつうの出来事だと思っていたけど、今思い返してみると部屋に忘れ物をしなかったら、僕の人生は全く違ったものになっていただろうね」

夕暮れが近付き、中村さんは私に泊まってゆくかとたずねた。次の日は別に何の予定もなかったので喜んで泊まることにした。私達は入り口の土間の方にもどり、中村さんは夕食の材料を見つかった。以前の訪問からご馳走が期待できるのは分かっていた。中村さんは僕の知っている中で最も優れた料理人—みんなに知られていないが—である。彼にとって調理することと食べることは仕方なしにすることではなく生活の中心となるべきことなのだ。

「『今ワルデン池で』を読んでいて、面白いけど、食べ物を育てることと調理についてもっと書いてあってもいいと思うんだけど。自然の中で、自然と共に生きていう生活は50%は食べ物に関わっているものだよ」

「それに変わらね。ソローは、森の中で2年とちょっとしか住んでいないね。まるで本を書くだけに森に入ったみたいだね。何かの生活を理解しようと思ったら10年はかかるよね。ソローはどちらかと云えば旅行者だね」 私は笑った。こんな異端な説が偉大なソローに対して言われるのはきいたことがない。大抵の人々にとってこの作家は田舎の生活を意図的に選んだ偉大な先駆者なのだ。

中村さんは裏の部屋へ行って「ヒマラヤの村のリズム」という本を持ってきた。「この本には僕が居た村のことが書かれているんだけど」、彼は白黒の写真を示して言った。それは霧深い荒々しい山肌の山稜に石屋根の土の家が散在し、遠く背景に雪をいただいた山頂の見えている写真だ。「これは僕が木版の勉強した僧院」ページをめくり「この人が僕の先生、タプケ ケンドン」彼は窓辺に座った僧侶の写真を指さした。その人の顔は、高地の寒さと乏しい生活が長年にかけて刻んだしわを見せている。

私は我を忘れてページをめくっていった。美しい写真とその横にシェルパの村人の言葉とチベット仏教教典の不可思議な引用が不揃いに並べてある。私はそれを読みながら村人の生活がどんなものか感じ取った—その非常な簡素さと同時にその意味深さも—中村さんが日本で暮らす中でいかに欲望をへらし、消費を削るかを実際に肉体的に感得させた彼らの生活……。一番近い車道まで、電線の通っているところまで歩いて五日かかる村、岩と草におおわれた風の強い稜線の村の暮らし、村人は肉体の強靱さと—彼らのことばによれば—謙虚さ、ねばり強さ、そして迷いのない知恵を身につけている。

「シェルパの暮らし方を見て、僕もそういうふうに住らしたから、こここの谷へ来てはじめてこの家を見たとき、同じようなやり方で暮らせるってわかったんだね」彼は家にある3つの電球のうちの1つにスイッチを入れ、クミンシードとしょうが、塩、にんにく、そして、赤とうがらしを石をくり抜いて作った鉢とすりこぎでつぶしはじめた。そして背のひくい土のかまどに火をおこし、真っ黒になったフライパンをのせ、よく研がれた包丁で玉ねぎを小さい角切りにし油の入ったフライパンに入れた。彼はすべての動作を大変注意深くこなし、火を調整し、それぞれの材料の分量を目で確かめる様子など（しかし計りなどしない）見ていると面白い。そして切ったジャガイモとキャベツと、それから重い石のすり鉢の中でつぶした香辛料を次々と入れていった。それを見ながら、ここに一番近い街（バスで2時間かかる四国の都市）でも本格的インド料理はないのに、この山中で冬の寒い夕刻にポテトビンダロウを食べるなんてすごくおかしくて、すごく素敵なことだと思った。

彼はひなびた土地に住んでいるが決して退屈な人間ではない。食事中私達の話は、日本経済の、手仕事から情報処理への変遷、具象対抽象美術の彼の持論、そして日本の若者が顔を黒く塗って都会のアフリカンアメリカンの着こなしを真似る現象にみられる彼らのアイデンティティと、そのシンボリズムにまで及んだ。彼は多くの情報をNHKのラジオ番組から得るのである。NHKは、合衆国のラジオを聞いて育った人間にとっては驚くべき高レベルの、洗練されたオーディオエッセイと文芸討論を放送している。彼に常に何を聞いているのかと聞くと「僕は文芸、美術の季刊紙が好きなんだよ」と言ってテーブルの横にあるぶ厚い図

粗糖をかぶせた、快い歯ごたえのビスケットは黄緑の薫り高い茶にぴったりのお茶受けだ。

火のそばで暖まっている間、煙は立ち上って私たちの頭の上の黒くなった屋根木のあたりに集まっている。開いた引き戸の間から、うっすらと雪をかぶった山々を眺めながら、中村さんはやがてこの生活へと辿り着くまでの旅の話をはじめた。

「子供の時から、ずーっと」彼は語った。「僕は住んでいた家の後ろの山を見ていたんだ。向こう側には何があるか知りたかったね。自分の住んでいる場所と自分の持っているもので、満足している人もたくさんいるけど、それはそれで良いのだけれど、僕はね、7歳くらいだったかな、自分で行けるようになったらすぐ、一人でバスに乗ってとなりの町を見に行行ったね。大きくなるにつれてだんだん遠くへ遠くへと行くようになって、それで、日本中ずいぶん見たけどやっぱりまだその向こうを知りたかったね。工場で働くようになって、収入が安定してからも同じあこがれがあったね。大洋の向こう側はどんなか知りたかった。」

彼が版木に刻む細かい幾何文様のように、彼の話しぶりは的確で啓発的だ。しかし真面目すぎるわけでもない。旅の話の途中で、彼の思慮深げな顔は、生き生きした笑いでしばしばくずれる。藁のマットに座って茶を飲みながら人生のことなどを話していると、4、5時間はすぐ過ぎてしまう。

そして「仕事を辞める決心はすぐに付いたね」彼は続ける、「自分の人生を振り返って気づいたの。ある朝起きようにも起きられなくて、気付いたら年寄りになっていて、世の中何も見ていなかったことに気がついて後悔でいっぱいになるんだって」

「もちろん」話は続く、「後悔しそうなことは2種類あるよね。どこか知らない国で行き倒れになってみじめで、お金もなくて、『ああ、自分は仕事を辞めてしまったんだ』って思うのってすごくありそうなことだ。だけどこの可能性と、65才で退職して、工場で働く以外何も知らないまま人生を終わるのを比べたとき一わかったよ。さっき言ったとおりに辞める決心は瞬間についてよ」

中村さんが仕事を止めたのは28才のときだった。日本を離れ、シベリア鉄道に乗って一モスクワで乗りかえて一ヨーロッパへやって来た。その後2年間、彼は旅に明け暮れた。自転車に乗って北欧からフランスまで抜け、アルプスを越え、イタリア半島を全長下り、再び北上してドイツを通り殆どの東欧諸国をめぐり、ギリシアへ入った一すべて単独で。私が旅の全走行距離をたずねると、しばらく考えて大体14000マイルぐらいだと答えた。

「ある時点で」「金を使いきってしまって仕事を探しはじめたんだ。スウェーデンだった。で、お金がどんどんなくなってゆくんだよ。毎日50軒ぐらいの店へ仕事はあるかって聞きに行くんだよ。どの店でも「NO」なんだ。毎晩胃が空腹でキリキリしてね、特にストレスもあって一どうしようってすごく心配だったよ。心の底で食べ物を盗むことまで考えたね、何とか食べ物を手に入れなきゃあって。人間も飢えたら悪いことを考えるのはごく自然なことだよ」

「どうして両親に手紙を出さなかったのですか」私が割り込んだ。「お金を送って下さいって?」「いいや」さっと答えた。「日本を出る前に親に相談しなかったんでどんな手助けも頼むつもりはなかったの。」「それで」続けて「ちょうどお金が殆どなくなったときある人が皿洗いの仕事を廻してくれてね」そして彼は付け足しのように言った。「その時に分かったね、お金の焦点を当てて生きるのは絶対に僕の生き方じゃないって。ずっとお金のことを考えていると自分の性格をゆがめてしまうよね」

大抵の人はこんな経験のあとでは、私が思うに多分全く反対の決断を下すのではなかろうか。多分中村さんの生き方で何よりも人と異なっているのはこういう哲学的アプローチで、いかに彼のやり方が徹底的であるかが分かる。けれど中村さんが殆ど金本位経済の枠外で暮らしている人々に出会うのはその後のことである。中村さんは本来は木版の勉強のためにヒマラヤの小村を訪れたのであるが、村人たちと暮らす間にだんだんと彼らの生活に順応していった。そして最終的には1980年代の殆どをあるシェルパの山村の小さな家屋で過ごすことになった。

「時々思い返すと、人生の曲がり角っていうのは」中村さんは思い起こす。炎から顔を上げて「一たとえばゲストハウスを出て歩いていたときに忘れ物に気づかなくて取りに戻らなかつたらロビーにいた男の人に

# 乏しさの中の豊かさを生きる

「もうひとつの豊かさ」から

Andy Couturier

訳 渡部 アツ子

**四** 国の谷深く切り込んだ山の奥、急峻な小道を、棚田を通り越し、谷に沿って曲がった石垣、竹林、杉林の濃緑の影を過ぎると、やがて工芸家の中村さんの木造の小宅に辿り着く。家の前からは細い谷をはさんで向かいの山のそこここに、スレート屋根の農家が、深緑のタピストリーに散らばっているのがくっきり見える。数百フィートの下方では谷いっぱい急流の水が谷底をけずって下ってゆく。

中村さんは、大抵は家に居る人だ。－但し、ネパールの山奥の寒村でチベット仏教の坊さんに木版を習っているとき以外は。それで、今日また彼との会話を楽しみに、冬の朝に訪ねてみると、中村さんは留守だったのでおやっと思った。中村さんは電話を持たない。それで、在宅かどうかはこの曲がりくねった小道を上がってくるまでわからないのだ。

古びた木製の郵便受けに書き置きを残して、来た道を本道の出合まで下った。本道を歩きながら、谷の水が岩面をすべり、碧緑の淵へなだれ込むのを見ていた。その谷が本流の勝浦川に合流するところの橋を渡り、私は温泉の建物に向かっていった。浴場に入って驚いたことには、坊主頭の中村さんがすぐそばの洗い場で体に石けんを塗りたくっているではないか。

「うん」、中村さん。「冬の間は3回くらいしか出かけなくて、大抵は温泉だね。夕べの雪で風呂の水道管が凍ってしまって、それで温泉へ来ることにしたの」

ミネラルたっぷりの湯に浸かって私たちは暫く話をした。そのあと体を拭きながら、彼は、私に家に戻って地元の茶－「阿波晩茶」を飲んでいかないと誘ってくれた。山道を登っていくと、冷たい空気の中で私たちの息が蒸気の小さな塊となった。中村さんは、この特製の発酵茶は今では日本のローカルな二地域と、面白いことにはビルマの片田舎でしか作られていないと言った。

家に着いて中村さんは、1つの破れもない紙の”しょうじ”戸を引いて開け、私たちは土間に足を踏み入れた。日本の農家の玄関の間は普通土間になっている。が、普通でないのは目の前にあるネパール風の土の竈（かまど）だ。これで中村さんはすべての調理をこなす。靴を脱いで居間に上がり、中央の囲炉裏の周囲にめぐらされた粗い藁むしろの上に座った。中村さんが火をおこす間、私は藁の壁に吊り下げられた古い手製の道具や隅の大きな二つの粉引き石を眺めた。この石は小麦を粉にするのに使う。

中村さんは上手く火をおこす。数本の薪を灰の上に組み、壁のそばの編み籠からぱりぱりに乾いた杉の葉を取って間に置いた。そして、割った竹を－燃えやすく火勢が強い－杉葉の上に乗せ、最後に直径1インチの短い枝に乗せた。それらの材は前の年に集められ、長さを合わせて切られ、乾かして家の前の棚に種類別にきちんと並べて貯えられていたものだ。

いつもながら最初のマッチで火はついた。

中村さんは42歳でネパールから戻って、ここに住み着いてもう11年近くなる。私が初めてここを訪れたときには彼の見るからに禁欲的な生活の仕方の根底には何か道徳的か倫理的か、何か哲学があるのだろうと想像した。

「違うよ」中村さん。「僕がやっていることは何でも本当にこうやるのが楽しいからだよ。」

中村さんは形の良い鋳鉄のやかんを囲炉裏の上から下がっている鉤に引っ掛け、中の水が湯気を吹き始めると、缶から一握り乾いたオリーブ色の葉を取り出して、まだらの赤茶色の陶器の急須にいれ、沸騰した湯を茶葉の上へゆっくり輪を描きながら注いだ。まるで苗を植える時のような注意深さだ。それから後ろの木の戸棚のもうひとつの缶に手を伸ばした。中身はこれも彼の特製、ネパール風の堅いねじれビケットで、中村さんはその作り方をシェルパの村で習ってきたのだ。缶を傾けて陶器の小振りの皿に5、6個移した。